

## エミール・ノルデの故郷を訪ねて

宮川由衣

エミール・ノルデはドイツ表現派を代表する画家のひとりであり、ナチ政権下のドイツでは頹廢芸術家として制作禁止令を受けた画家である。

ノルデの故郷は海に近いヴィーダウとグリューナウの流域地帯、ローゼンクランツからルッテビュル、ウーテンヴァルフ、ゼービュル、そして彼の生地ノルデ村に至る地域を指す。

私たちは、早朝ドイツ第二の都市ハンブルクのアルトナ駅を出発し、ドイツとデンマークの国境そばに位置する北シュレスビヒ地方のゼービュルにあるノルデ美術館をめざしてデンマーク行きの電車に乗った。

ハンブルクの市街地を抜けると車窓には、すぐに平べったい緑色の景色が広がった。低湿地帯に特有の広大な空と大地の風景は目的地のクランクスビュル駅までの2時間半ほどの電車の旅の間ずっと続いた。



クランクスビュル駅の近くから、自転車でノルデ美術館のあるゼービュルへと向かった。自転車の旅では干し草の香りの風を切り、車窓から見えた低湿地帯の自然をより近くに感じることができた。

1時間ほど走ると、草原のなかにノルデ美術館の小さな看板が見えた。



ノルデは自分の作品をひとつの場所に集めて展示することを望んでいた。1926年、彼は空地として放置されていた古い築土と、それに接する農場を購入した。ノルデはここゼービュルを彼の作品の永続的な故郷とすることを考えた。1927年、その土地にノルデ自身の設計による「ゼービュルの家」が建てられた。まず居住部分とアトリエが建てられ、1937年に「絵画の広間」が完成した。ノルデ美術館はこれらが一般に公開されたものである。部屋は小さく、「絵画の広間」に足を踏み入れた時にはノルデの自宅に招待されたかのような気分になった。



ノルデ「絵画の広間」にて(1948)



現在の「絵画の広間」

「私は世界中を旅行していますが、私の芸術は故郷の土地に深く根ざしたものだと確信しています。それはふたつの海に挟まれたこの細長い土地なのです。」

エッセンの美術館長エルンスト・ゴーゼブルフに宛てたノルデの手紙

2006年に新たに誕生したフォーラムは、ノルデの生涯と仕事について紹介する資料館となっている。



資料館にはノルデが生活していた当時のゼービュルの写真が展示されていた。私たちが美術館への道すがら目にした光景と変わらない。今でも、ノルデ美術館のすぐ隣には放牧地があり、フォーラムの窓からは牛たちの姿が見えた。ちなみに、乳用牛のホルスタインの原産地は、ここシュレスヴィッヒ・ホルシュタイン州である。



フォーラムを出てノルデの花園を歩いていると、花々の隙間からノルデの設計による「ゼービュルの家」が見えてくる。



ノルデとアダ夫人(1941)

エミール・ハンゼン(後に故郷の名ノルデと改名)は 1867 年 8 月 7 日、北シュレスヴィヒ地方トンデルン近郊のノルデ村に、農場主の父ニールス・ハンゼンと母ハンナ・クリスティーナの第6子として生まれた。

子供時代のノルデは世間とは隔絶した田舎で自然との密接な関わりの中で育った。ノルデは少年期から画家になることを望んでいたが彼の画家としての歩みは遅かった。ノルデは 1884 年から 4 年間、家具工場での修業を行った。彼は家具工場での仕事の傍

らで素描の練習をした。

1894年からアルプスの山々を描いた連作を描き始め、これらの作品を「山岳絵葉書」として大量に印刷・発行することで、ようやく画家の道を歩みだすことが可能となった。資料館では、この「山岳絵葉書」を目にすることができた。



ここにおいて、アルプスの山々は伝説や童話の登場人物として幻想的な姿で擬人化されて描かれていることが分かる。



《ピエロと白ユリ》(制作年不詳)

《悪魔と学者》(1919)

《トリオ》(1929)

ノルデの芸術は内面の芸術である。

「内面性」、すなわち「メランコリー」はドイツ人の心性である。

作家トーマス・マンは1945年に、講演「ドイツとドイツ人」において、ドイツ人にしばしば見られる「繊細、沈思、非世俗性、自然崇拝」の本源をこの「内面性」に求めている。

(高橋義人『ドイツ人のこころ』11頁)

マンによれば、「ドイツ人の世界に対する関係は、抽象的にして神秘的、つまりは音楽的である」のだが、それらの特徴もドイツ人の「内面的」な特徴に帰着するという。

ノルデは故郷への帰属意識が強く、自らを「最も北方的な画家」と主張していた。

彼の空想は、その風土のなかで伝承されてきた北欧のサガ(伝説)や叙事詩の生物と結びつき神秘性をもっている。

ドイツ人はキリスト教を信じつつも、意識の深層では古代ゲルマン教に見られる多神論に共感をもつ、すなわち意識の二重構造を有するようになったことが指摘されている。(高橋義人『ドイツ人のこころ』190頁)

多神ではなく唯一神を信ずるキリスト教にとって、神は自然の内にはなく、自然を超越したところにいる存在であった。一方、古代ゲルマン人にとって森は神々や精霊のすみかでもあった。森に囲まれた野原を住処とする古代ゲルマン人にとって、神々は自然の諸力の象徴だったのである。

こうしたものに対する信仰ないし迷信は、ゲルマン民族が太古の昔から有していたものであるが、八世紀以降、キリスト教が広まってからもドイツ人の心の奥底に深く生き続けていた。

そのため中世のドイツ人は、もともと聖なるものであった森を、キリスト教と結びつけるに至った。こうして、ドイツにおいてのキリスト教は神秘的色彩、秘儀的性格を強めていった。

ドイツ人特有の自然のなかに神秘的なものを見出す性格は、北方の画家たちに共通する特徴のひとつである。彼らは自然のなかに、自らの精神世界を投影している。

ノルデの海をモチーフとした連作の中で最初の傑作と称えられる1913年の『海』において、ノルデの精神性は特に顕著に現れている。

この作品を目にして図版からは感じ取ることの出来ない色彩に感動した。

深い青緑、泡立つ白、生命の黄色が織り成す海は生命の躍動、そしてノルデの静かに激しく燃える性格を象徴しているかのようであった。



『海』(1913)

ゼービュルの花園は、ノルデ自身の手により作られたものである。  
ノルデはこの場所で花をモチーフとした作品を多く描いた。

緑色の単調な低湿地帯のなかに突如として姿を現す花々の景色は楽園のように感じられる。

ここの花々は、赤、橙、黄色といった華麗な色彩のものが多い。

イングリッシュガーデンのような野趣あふれる庭園とは異なり、どこか異国的で強烈なインパクトを与える花が多い。

ゼービュルの自然の中で体験するノルデの花園での色彩体験は、まるで幻覚のようである。ノルデの花園のなかにも、明らかにノルデの精神世界が現れていた。

花園では、作品に描かれた花々を見つけることができた。



『大きなひなげし(赤、赤、赤)』(1942)



『紐鶏頭、ダリア、ルードベック菊』(制作年不詳)







『熟した薔薇の実』(制作年不詳)

彼は妻と彼自身が埋葬されるであろう場所を選んで、そこにアダの〈A〉、エミールの〈E〉をつづる植物を植えたといわれている。

写真の帽子とジャケットは、ノルデの最後の自画像に描かれているものであると思われるものだ。

ノルデは 1947 年に 80 歳の誕生日を祝して、この最後の自画像を描いた。これは性格描写において優れた自画像であるという。



『ノルデ』(1947)

ノルデの画家としての生涯は、ナチとの関係を抜きにしてに語ることはできない。ヒトラー率いるナチ党が政権を獲得すると、近代芸術は「頹廢した芸術」として非難された。特に、ノルデとバルラハ(Barlach, Ernst 1870-1938)は攻撃の対象となった。

ハンブルクではバルラハ美術館を訪れることができた。この他にも、退廃芸術家として迫害された芸術家たちの作品を多く目にする事ができた。どの作品も人の心に訴えかける力をもっていた。このような力は、ナチスの力とは対照的であり、ナチスにとっては邪魔な存在であったのだ。



退廃芸術展に『キリストとヨハネ』という題に改変されて展示された『再会』(1926)

初めのうちはノルデやバルラハの作品は北方的芸術として多くのナチ党員に称賛されていた。

宣伝相ヨーゼフ・ゲッベルスはノルデの絵画を好み、花の絵をナショナル・ギャラリーから持ち出して自分の部屋に飾らせていたという。

しかし、芸術家として挫折したヒトラーの影響の下、ゲッベルスも近代絵画に対する攻撃を示す態度へと転換した。

自身の芸術をドイツ的絵画であると確信していたノルデは、なぜナチスが彼の芸術に対する攻撃を行うのか理解に苦しんだ。

近代芸術が徹底的に攻撃されたのが 1937 年にミュンヘンで開催された「退廃芸術展」である。ノルデの作品の展示数は最も多く、32 点が展示され、特に 9 点組の『キリストの生涯』(1911-1912)が誹謗の中心的な対象となった。

この作品はのちにあわゆる手段を尽くして取り戻すことに成功したため、現在ノルデ美術館に展示されている。



写真は「頽廢芸術展」ベルリン会場における『キリストの生涯』(1911-12)の展示(1938)

ノルデは 1095 点もの作品を没収された。そして、その一部は外貨を獲得するために外国へと売却された。その結果救われた絵画もあるが、大部分は行方不明となってしまった。

1939 年 3 月 20 日にはノルデの作品を含む 5000 点近い油彩画、水彩画、素描、版画が「利用できない廃物」としてベルリン消防局の中庭で焼かれた。

「我々は今から、我々の文化を墮落させる最後の分子どもに対して、仮借のない掃討戦を進めようとしている。……これから、先史的石器時代人たち、芸術の吃りどもは、彼らの祖先の洞窟へと戻り、そこで、世界共通のプリミティブで下手くそな作品をこしらえていけば良いのだ。」

「頽廢芸術展」の開催前夜ヒトラーの演説

1941 年 8 月 23 日付で、ノルデは全国造形美術院から除名と制作禁止の処分を受けるに至った。この迫害の時代にノルデが「描かれざる絵」と呼ぶ数百枚の小さな水彩画が生み出された。材料を買うことが禁止され、ゲシュタポによる取り締まりがあったため匂いの強い油絵具を使うことはできなかった。このため、ノルデは和紙の残りきれに水彩絵具で描く表現手段を選んだ。

「描かれざる絵」の制作と並行して小さなメモに綴られた「余白の言葉」には内的亡命の時期のノルデの言葉が残されている。

「夢や空想、幻想の中は、法則や冷静な判断とは全く関係のない世界だ。そこは開放的で素晴らしい場所であり、魅力と熱狂に溢れた領域だ。それは明るく、深く、時に軽い精神体験の中に存在する。夢を見たり、覗いたりできない人には、全く理解できない世界だ」

エミール・ノルデ(1943)



『海に面した山腹』(1938-45)

戦後、ノルデは 1945 年から 1951 年の間に 100 点以上の油絵を描いたが、それらの圧倒的多くは「描かれざる絵」に基づくものである。

1956 年 4 月 13 日、ノルデはゼービュルに歿した。彼は妻のアダと共に、ゼービュルの花園の端にある墓所に眠っている。

ゼービュルのノルデ美術館には毎年 3 月から 11 月の間に 8 万人の観覧者が訪れる。ゼービュルを実際に訪れて実感したのは、ノルデの作品の中に故郷の風土が大きく作用していると同時に、ゼービュルのこの土地にノルデの精神世界が投影されているということだ。

ノルデは自らの絵画を「精神的な子供たち」と見ていた。

迫害により多くが失われたが、ノルデの「精神的な子供たち」は今日こうしてひとつの場所に集まり楽園的空間を形成している。



ゼービュルの土曜日

2007年に完成したベルリンのノルデ美術館では多くの水彩画を鑑賞することができた。



ノルデ美術館(ベルリン)

#### 参考資料

高橋義人著『ドイツ人のこころ』(岩波書店 1993/1)

『エミール・ノルデ展』(国立西洋美術館監修 1981)

『エミール・ノルデ展』(エミール・ノルデ展実行委員会監修 2004)

ヴェルナー・ハフトマン著 宝木範義他訳『エミール・ノルデ』(美術出版社 1970/7)

関楠生『ヒトラーと退廃芸術〈退廃芸術展〉とく大ドイツ芸術展〉』（河出書房新社 1992/10）

・作品の撮影は禁止されていたため、図版から引用したものを掲載している。